

#S9 アレン篇 -T.C. 4764～4765-

君は、知っているかい？

――墓場に葬られているのは、亡くなった人の身体だけじゃない。

暗く、冷たく、深く、静かな土のなかに

もっと別のものが――眠っていることがあるんだ。

#S9 アレン篇 -T.C. 4764～4765-

アレン： えー、あのアレン・リッジリーです。今春、ボロメオ大学情報工学部を卒業、ヴェクター・インダストリー入社。

本日付けで、第一開発局一型OS設計部に配属されました。――よろしくお願いします！

ケビン： 歓迎するよ、リッジリーくん。僕は主任のウィニコット。

わからないことがあったら――そうだな、こちらの先輩、ウヅキくん聞いてくれ。

シオン： よろしく、アレンくん。シオン・ウヅキです。

アレン： よ、よろしくお願いします！

（うわぁ、綺麗な人だなぁ。こんな人が先輩だなんて、ラッキーだよぉ――）

ケビン： よかったな、ウヅキくん。入社して一年、君にも待望の後輩ができたというわけだ。

シオン： ええ、これで意地悪な上司から雑用や面倒を押しつけられる日々が終わると思うと、嬉しいです。

ケビン： おいおい、意地悪な上司本人を目の前にして、という言葉じゃないよ。

シオン： それもそうですね――ふふ。

アレンくん、ちなみにいまのは冗談だから。仲良くやっていきましょうね。

アレン： は――はい！

ケビン： 君はボロメオの出身だと言ってたね。じゃあ、僕と同窓ということになる。期待しているよ。

アレン： あ、主任もボロメオなんですか。

あのー僕、4つ年上の兄がいるんですが、もしかして同級生だったりしませんでした？
アラン・リッジリーっていうんですけどー

ケビン：すまないーちょっと記憶にないな。ご一緒したことはなさそうだ。

シオン：そりゃそうですよ、主任が卒業したのって十年前、15歳の時でしたよね。

アレン：じゅ、15歳でボロメオを卒業！

ケビン：まあ、うちには飛び級した若い人間が多いからね。
ウヅキくんだってまだ18歳だろう？

シオン：先月、19になりました！

アレン：ええっ、じゃあ、僕より年下なんですか！？

（はあー僕の故郷じゃ、21歳でボロメオ卒なんて、めったにないことだったのにー）

シオン：あ、えーと、そういうの気になるー？

アレン：い、いえ、先輩は先輩ですから！ いろいろ教えてやってください！

シオン：ううんーこちらこそ。いろいろ助けてね、アレンくん。

アレン：は、はいー

こうして僕の、ベクターでの生活がはじまった。
多少の不安もあった社会人生活は、嬉しい誤算ながら、
天国にも等しいほど素敵なものだった。
すぐ上の先輩であるウヅキさんと、
一緒にパートでプログラミングする機会が多かったからだ。
彼女と一緒にだとなぜ天国だったかー
それについては、あえて語る必要もないだろう。

そしてー一年が過ぎた。

ジェシー：あら、珍しいー

アレン：あ、ジェシーさんーむぐーうぐぐぐぐぐ！

ジェシー：あーあ、なにサンドイッチ詰まらせてんのよ。

ほら、このアイスコーヒーあげる。

アレン： うぐー—ゴクゴクゴク。

ぶはあ———

はあ、ありがとうございます。ジェシーさん、あなたは命の恩人です！

ジェシー： なによ、大げさね。

——それより、あなたがこの公園でランチとってるとこ、初めて見たわ。

そのベンチ、いつもは私の指定席なのよ。

アレン： ええっ、あ、あのすみません。すぐどきますから———

ジェシー： いいのよ、充分ふたりで座れるサイズよ、このベンチ。私はこっち半分でいいわ。

アレン： は、はあ———

ジェシー： そっか、今日は主任とシオンが学会に行ってるのよね。

あなた、いつもあの二人と一緒に食べに行ってるでしょ。

アレン： ええ、そうなんです———

ジェシー： ちょうどいい機会ね、あなた、あれやめなさい。

アレン： ええ、なぜです！？

ジェシー： はあ、やっぱり承知の上でやってるわけじゃないのよね——

アレン： な、なにがです——？

ジェシー： あなたたちの三角関係、気づいてないのは当事者三人だけ——ってことよ。

アレン： さ、三角関係！？ ——って、どういうことですか！

ジェシー： あなたがシオンに憧れてることに、主任とシオンは気づいてない。

二人がつきあってることに、あなたは気づいてない。———そういうこと。

アレン： 主任とウヅキ先輩が———

ジェシー： ほら、やっぱり気づいてなかった。朴念仁の主任と、鈍いシオンはともかく、あなたはどうかしてるわよ。

なんで、あのふたりのこと、気づかなかったの？

アレン： そういえば、ウヅキ先輩とランチ食べに行くと、なぜか主任も一緒になることが多いな——って。

ジェシー： そ・れ・は！

あなたがカップルの食事に割り込んでるの！

アレン： ———

ジェシー： ほら、そんなに落ち込まない！

アレン： ———

ジェシー： こっちのスープも奢ったげるから、はいーグビッと飲んで、元気出して！

アレン： はあ、ありがとうございます——

———グビッ。

ジェシー： いい、リッジリー。

あんたはお坊ちゃんだけど——私が嫌いにならずにすむ、珍しい種類のお坊ちゃんみたい。

だから、忠告しといてあげる。——シオンのことはあきらめなさい。

アレン： —————

ジェシー： 主任とシオンはね、すごく上手くいった組み合わせよ。
互いに欠落した部分がいっぱいあるのに、それを補い合ってる。
あなたじゃ、シオンに欠けてるものを、埋めてあげられないもの。

アレン： —————

ジェシー： もちろん、男女のことなんて、端から見た当て推量じゃ断言はできないけどね。
でも、私の目にはそう見える。私の経験とカンを信じるなら、いま言ったこと、忘れないで。

アレン： —————

ジェシー： じゃあ、行くわ。このベンチ、明日からはあなた専用にゆずってあげる。
それじゃ、ね————

アレン： —————

その日、僕はずっと、
ジェシーさんの言った言葉について、考え続けた————
そして、どう考えても、ある結論にしか達することはなかった。
彼女の言葉は、
”すべて正しい” —————のだと。
だけど、僕はあきらめが悪い人間だったようだ。
どんなに希望が少なくとも、自分の想いだけは告げよう。
それで、もうあの人と楽しく
ランチをとることができなくなったとしても、かまわない。
————そう、決心したのだから。

アレン： ——うわ、なんだこの雨！

くそ、曙光に一週間も出張だったから、自然現象なんて忘れてたよ。
やっぱり、惑星よりコロニーの方が、環境いいよなあ。
あーあ、ズブ濡れ————お土産の箱、大丈夫だよな。
（今日は一型 OS を搭載した KOS-MOS の実働試験だ。ついに、彼女が起動する——
夜にはみんなで打ち上げだ。その席上、プレゼントを渡す機会もきっとあるはずだ）
はやく戻らなくちゃ——よし、ラボまで走ろう！

—

アレン：———な、なんだ！？

ひ、ひどい——ラボがこんなに荒らされて———

い、いったい、なにがあったんだ！

@：ほら、下がった下がった！　ここは立ち入り禁止だよ。

——ん？　その制服、あんた——この関係者か？

アレン：開発スタッフです！　いったい、なにが——

@：暴走事故だよ。開発中のアンドロイドが暴れ回ったらしい。

アレン：まさか——KOS-MOS が——！？

@：ちょうどいい、協力してくれ。関係者を捜してたんだ。

アレン：協力って———

@：損傷が激しい遺体が多くてね。服装とかから、身元を特定できんものか、試してほしい。

アレン：遺体——多くて——！？

@：ほら、そっちの袋が全部そうだ——

アレン：！！！！！！

ああ———

ハンスさん、チャウさん、これは——バンスさん——？

！

そんな———

ジェシーさんまで———

なぜ、なぜこんなことが——

@：こっちの人は、どうも責任者らしいな。

息絶える寸前に、我々に暴走事件の発生を通報してくれたのさ。

おかげで、初動がはやくなった———

アレン：ああ———！

ケビン主任———こんな、こんなことって———

（主任、あなたは僕のライバルだけど、決して嫌いにはなれなかった——

あなたの理論、情熱、すべて僕の目標だったのに——）

@：しかし、妙なんだよねえ。

こっちから向こうの遺体は全部、ヴェクター[おたく]の職員のものじゃないんだよ。

いったい、なんだってこんなにたくさん——それも、武装した遺体が——

アレン：え——じゃあ、職員はこれで全部——なんですか？

@：あ、ああ、そうだが——

アレン：あの、じゃあ、負傷者は——若い女性がひとり、運ばれたはずですよね？

そうだ！ それに KOS-MOS——暴走したアンドロイドは！

@：ちょっと待ってくれ、わしらもいま、到着したところなんだ。

救急車両も呼んだばかりで、誰も運んだりしとらん。

アレン：それじゃあ——

——

——まだどこかにいるんだ！

@：お、おい、君——！ そっちの現場検証はまだ！

—

アレン：はあ、はあ、はあ——

どこかに——きっとどこかにいる！

ウヅキ先輩と、KOS-MOS が——

KOS-MOS がもう稼動していない——ということは、ウヅキ先輩が止めたんだ。

きっとそうに違いない。じゃあ、どうやって——

考えるんだ、それがわかれば、先輩のいる場所もわかる！

——いくら先輩が武道の達人でも、KOS-MOS の機動性には対抗できない。

だとしたら——

そうだ、遮蔽物のない広い空間。

KOS-MOS の機動を予想しやすい場所で、正面から迎え撃つ——それしかない。

だとしたら——

——

屋上か——！

—

アレン：ウヅキ先輩——っ！

シオン：——

アレン： ウヅキ先——輩——？
—————！
大丈夫だ、息はある——
先輩は、ウヅキ先輩は——
生きてる———！！
救護班、はやく来てくれ！ そうだ、生存者だよ！ 屋上だ！
はやく来てくれ！ 生きててくれたんだ！
先輩が！ ウヅキ先輩が——生きててくれたんだああ！

ウヅキ先輩は、幸いにも軽傷だった。
ほとんど検査のみの入院生活が終わると、
彼女は黙々と事後処理をしはじめた。
ジェシーさんやみんなのことを思うと、すぐに涙が出てくる僕——
そのかたわらで、
感情のない人形であるかのように、先輩は働いていた。
KOS-MOS のプロジェクトは、きっと凍結されるだろう。
僕とウヅキ先輩は、
別々の職場へ配属されることになるかもしれない。
そう予感しつつも、
なかなか僕は自分の想いを告げることができずにいた。
そして、あの日がやってきた。
ケビン先輩と身よりのないスタッフが、
社が用意した墓地に、埋葬されることになったのだ。

シオン： うあああああああああああうううううあっ、うあっ———あああああああああああっ！！！！
アレン： （主任が泣く姿を見たのは、その日がはじめてだった——

明るくて、優しくて、おっとりしていて――そんな先輩の涙を、僕は見た
なぐさめる言葉も見つからず、ハンカチを差し出すこともできず、僕は震える背中を見つめていた
ポケットのなかでグシャグシャになっている、雨に濡れた指輪の箱を握りしめながら――)

先輩の涙を見た瞬間――僕は悟っていた。
悟らざるを得なかった。
たくさんの人たちの生命とともに、僕が自分の想いを告げる機会もまた――
――失われたのだと。
そう、この日――
僕の決意もまた、暗く、冷たく、深く、静かな土のなかに――
埋葬されたのだ。